

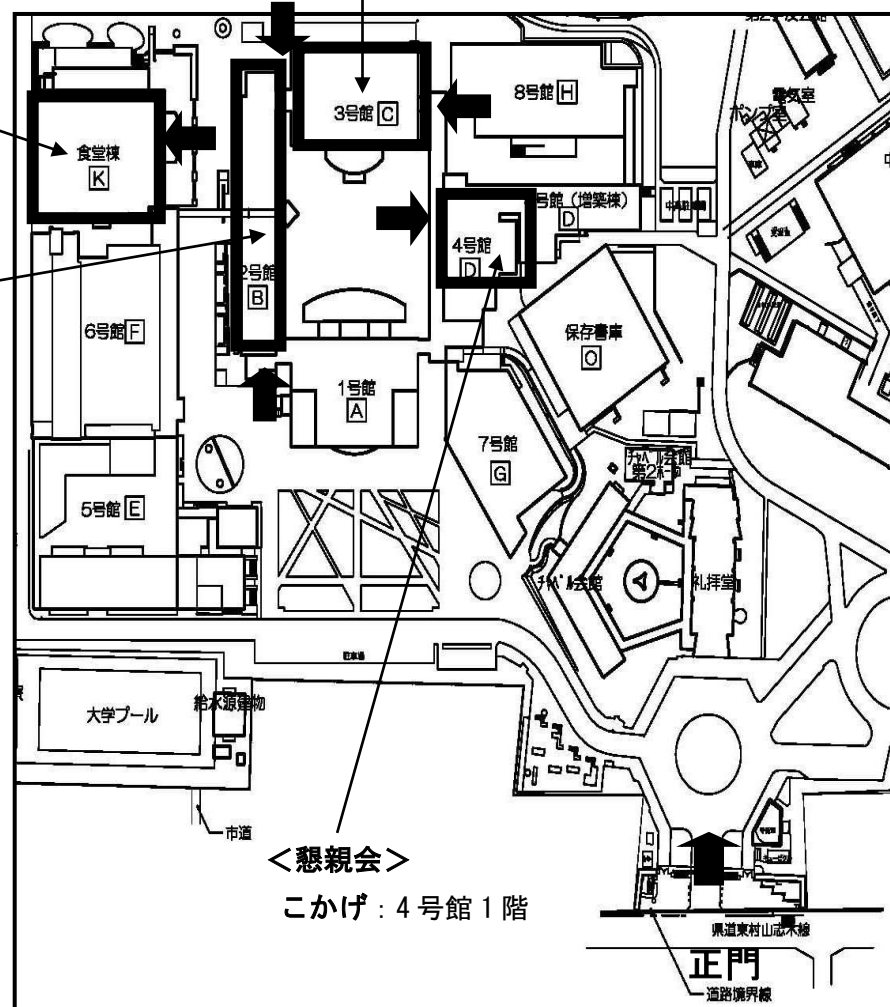
■会場案内図

➡ 出入口：建物への入退出可能箇所です。
 ※キャンパス内の出入口可能箇所が限られています。下記を参照のうえ、移動をお願い致します。

＜シンポジウム/講演会＞ N321：3号館2階

＜ランチョン座談会＞
 学生食堂 Forest

＜分科会＞ 2号館教室
 N231・N232・N233・N234
 : 2号館3階



＜懇親会＞
 こかげ：4号館1階

JR 武蔵野線 新座駅 ← → 東武東上線 志木駅

■運営委員会からのお知らせ

コミュニティ福祉学会“まなびあい”運営委員会では、運営委員になってくださる方を募集しています。
 ・年1回の年次大会、例会などに向け、隔月1回程度で運営委員会を行っています。
 ・委員は、在校生・卒業生・先生から構成されており、様々な方と知り合い、交流できる機会になります。
 ・やってみたい企画を、実現できる場にもなります。

関心のある方は、事務局(担当：佐藤)までお気軽にお問い合わせください。

＜コミュニティ福祉学会事務局＞ Tel 048-471-7308(火・水・木 10:00~15:00) Mail cchs@grp.rikkyo.ne.jp

MEMO

.....

.....

.....

.....

.....



コミュニティ福祉学会“まなびあい” 第6回年次大会

2013.11.24. Sun
10:00-19:00

プログラム

■ 分科会	10:00~12:00	各会場
■ ランチョン座談会	12:15~13:15	学生食堂
■ シンポジウム	13:30~15:30	N321
■ 講演会	15:40~17:10	N321
■ 総会/懇親会	17:30~19:00	こかげ

大会テーマ

「コミュニティ福祉って何？—暴力のない社会から幸せに向けて—」

コミュニティ福祉学会 “まなびあい” 第6回年次大会 「コミュニティ福祉って何？—暴力のない社会から幸せに向けて—」

震災後ゆらぐ価値観、経済発展のかけで置き去りにされている社会問題、共に生きることを阻む顕在的・潜在的暴力をめぐる問題が多々あるなかで、皆が幸せを感じられる社会とは何なのか？コミュニティ福祉を切り口に考えようというのが今大会テーマです。

コミュニティ福祉学部が3学科体制となり、これまで以上に多方面で活躍する卒業生が増えるなか、コミュニティ福祉という一つの旗のもとに卒業生・学生関係なく集い、改めてコミュニティ福祉について考えるような1日になればと思います。

+++++

■プログラム

10:00 ～12:00	分科会 自由演題発表9件が各会場にて行われます。各発表の詳細は、右記一覧をご参照ください。	N231 N232 N233 N234
12:15 ～13:15	ランチン座談会 ランチを持って学生食堂に集まりましょう！現役生・卒業生問わず、ランチをしながら気軽な座談会。仕事のこと、就活のことなど色々…のコミ福トーク。	学生食堂 Forest
13:30 ～15:30	シンポジウム 「卒業生シンポジストに聞くコミ福での学びと現在の仕事」 卒業生シンポジストに、コミ福で学んだことが仕事にどう役立っているかなど、学びと仕事について何うなかで、コミュニティ福祉の多様性や可能性を考えます。卒業生は今の仕事を振り返る場、学生は将来を考えるきっかけとして、ご一緒に語り合ひましょう！	N321
15:40 ～17:10	講演会 「暴力とは何か —私が見たこと、学んだことから考える」 NGO「地に平和」代表太田道子氏より、「暴力」とは何かについて、人間学的視点から考えられていること、および「福祉」を追求する時重要なテーマである共生の場としての「コミュニティ」について、これまでの活動をもとに語っていただきます。 ●講師：太田道子氏 ルーテル神学大大学院(アメリカ)、ヘブライ大学(イスラエル)、教皇庁立聖書学研究所(ローマ)、超教派高等神学研究所(エルサレム)を経て、新共同訳聖書(旧約)翻訳・編集委員を務める。古代オリエント史・旧約聖書学専攻。1991年から中東問題に関わり、1995年NGO「地に平和」創設。平和・人権と聖書の社会学的勉強会、イスラエル-パレスティナ紛争に関わる民生面の支援プロジェクトを実施。	N321
17:30 ～19:00	総会/懇親会 運営委員会の一年間の活動報告などの総会后、参加者同士、和やかな雰囲気の中で交流会を行います。 *参加費《学生・院生》無料 《卒業生・一般》1000円 《教員》2000円	こかげ

*ご不明点、お困りのことなどございましたら、お近くのスタッフまでお声かけください。

■分科会発表

会場	発表者(所属)/ 発表形式	発表タイトル・概要
N231 2号館3階	代表 笹谷 祥崇 (コミュニティ政策学科/ 社会調査実習質的クラス和ゼミ) ＜団体発表＞	「地域社会の問題解決に向けて～質的調査によるアプローチ～」 東日本大震災被災地支援・避難者支援、在日外国人支援、生活保護、社会復帰、高齢者問題、スポーツによる効果・影響、障がい者支援、コミュニティ形成をテーマにグループに分かれ、質的調査によってアプローチすることによって、様々な地域社会の問題を解決するための方法を探索的に検討している。今回は、問題解決方法を検討するための中間報告として、それぞれのテーマのグループから事例研究、インタビュー、ドキュメント分析の結果を中心に報告する。
	代表 鮎川 佳奈 (スポーツウエルネス学科3年生/ 松尾ゼミB) ＜団体発表＞	「東日本大震災における県外避難者をスポーツでつなごうプロジェクト」 東日本大震災から約2年半が経つが、県外避難者は今なお多く存在し、多くは仮設住宅や県が支援する借り上げ住宅での生活を営む一方で、現在も避難所での生活を送る人々がいる。避難所という隔てられた空間は外とのつながりが希薄になりやすく、避難者意識を消し去ることが難しい。また、避難所に住む人々はみな福島県双葉町の出身であり、双葉町民全員が原発事故の影響で県内外へ避難しており、バラバラになってしまっている。そこでスポーツが持つ人と人をつなげ、きずなを深める力で避難所を出て生活を営む上で長く住まう関係、そして再び双葉町民同士というつながりを持たせるために、「季節のスポーツでふたばをつなごうプロジェクト」という支援策を考えた。この支援策を軸とした本プロジェクトの提言ではコミュニティ形成、避難者意識の二極化といった問題の解決が望まれる。
N232 2号館3階	代表 上村 春香 (福祉学科3年生/ 相談援助演習 浅井ゼミ) ＜団体発表＞	「学校におけるいじめ問題について—子ども・親・教員の視点から考える—」 ■学校における、いじめ問題の実態 ■子ども・親・教員のいじめに対する意識調査の結果とその分析 ■まともく課題と考えられる対応策など。
	代表 常盤 麻美 (スポーツウエルネス学科3年生/ 松尾ゼミD) ＜団体発表＞	「在日外国人の孤立防止のためのスポーツ支援策の提言」 在日外国人の数は1990年には約107万人であったが2012年には約203万人を越えている。在日外国人にとって日本で暮らす上での障壁は、言語や生活様式の違いが推察できるが実際には身近に理解者・相談できる人がいないことが在日外国人を孤立させてしまっている現状がある。グローバル化に伴い将来、外国人が増加していくと予測される日本社会において、在日外国人が孤立せずに生活できる環境を整備することは急務である。そこで、世界共通の文化であるスポーツ(運動遊び)の力を活用することで在日外国人が日々の生活の中で孤立しないための環境づくりを支援策として提言したい。
	代表 小野寺 達彦 (スポーツウエルネス学科3年生/ 沼澤ゼミI) ＜団体発表＞	「スポーツウエルネス学科学生の体罰に対する意識について」 朝日新聞社が関東、関西の3つの私立大学の運動部員510人に行ったスポーツにおける体罰の実態と意識についての調査内容と同様のものを本学スポーツウエルネス学科に所属する1年生に質問し100人から回答を得た。性別、競技種目、競技履歴に分けて分析した結果、高校生までに指導者から体罰を受けたことがある学生は、朝日新聞社調査では33%であったのに対して、ウエルネス学科学生は26%であり、アスリートスポーツを実施しているものの方が多かった。また、体罰はあっていいと思うかという体罰を容認する意識については共通して、体罰を受けたことがあるものの方が容認する傾向が強かった。今回の調査結果を生かし、体罰をより減らすことのできる指導法や環境作りを研究し、体罰をなくすことを考えていきたい。
N233 2号館3階	代表 明田川 夏未 (スポーツウエルネス学科3年生/ 松尾ゼミA) ＜団体発表＞	「運動遊びに着目した防災行動力の向上と多世代交流を促進する支援策の提言」 日本は東日本大震災をはじめ、地震およびそれに伴う二次災害の被害を受けている。災害による被害者を減らすためには、災害時、自分の身を自分で守る術を身に付けておかなければならない。しかし、既存の防災訓練は単発的なものになりやすく、長期的な視野で防災行動力を向上させることは難しい。特に体力の低い子どもや高齢者は「助けられる側」とみなされ、防災で主体となることは少ない。防災を「運動遊び」という視点からとらえ、運動遊びを通して日常化を図るとともに防災行動力の向上、多世代間の交流、地域振興といった様々な分野への効果を生むものとしていきたい。そこで、小学生の夏休み期間を利用した月間プログラムを考えた。子どもや高齢者が主体となって、楽しみながら防災に対しての知識や災害時に自分や他人を守る術を身に付けることができる支援策を提言する。
	代表 種谷 大輝 (スポーツウエルネス学科3年生/ 松尾ゼミC) ＜団体発表＞	「知的障がい者における運動・スポーツの日常化を促進する活動拠点を狙って」 スポーツ基本法において「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利である。」「スポーツは、障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じた必要な配慮をしつつ推進されなければならない。」(前文、第一章第二条より抜粋)と定められている。しかし、実際に知的障がい者のスポーツ環境が整っているとは言い難い。その背景には、障がい者専用・優先のスポーツ施設が全国各地にあるものにも関わらず、障がい者の利用率が偏っており、多くの優先施設が有効的に利用されていないという現状がある。そこで、知的障がい者がより身近で気軽にスポーツに親しむために、全国の優先施設の拠点化を提言する。まずは、そのシステムを優先施設の1つであるサン・アドリティーズに広めて基盤を作り、7年後の東京オリンピック・パラリンピックまでにその他の優先施設へ導入、その後さらに公共施設にまで浸透させ、段階的に全国の知的障がい者が日常的にスポーツを行える環境を作り、知的障がい者の運動・スポーツの日常化を促進させたい。
	代表 鯨岡 沙瑛 (スポーツウエルネス学科3年生/ 沼澤ゼミII) ＜団体発表＞	「スポーツマンシップとは」 スポーツマンシップとは何か、世間ではどのように捉えているのかを知るため、12年次のスポーツウエルネス学科の学生にアンケートを実施した。質疑や性別、競技や大会成績などの分析の結果、スポーツマンシップとは幅広い意味で学生たちは捉えていることが分かった。スポーツマンシップについては学生はルールを守り、相手と正々堂々と戦い、相手を尊敬し、感謝の気持ちを持つことがスポーツマンシップであるという意見が多く、また試合の規模が大きくなるほどスポーツマンシップを優先することも分かった。例えば、スポーツの場をオリンピック、県/都大会、部活動、サークル、レクリエーションの5つに分け、スポーツマンシップと勝利のどちらを優先するかを調査した。ここでは大きな大会ほど勝利を重視する選手が多いことが判明したが、スポーツマンシップと勝利は対立しないという意見も挙げられた。また、どのような環境がスポーツマンシップの捉え方に繋がるかも競技によって異なることも明らかになった。
N234 2号館3階	コミ福祉協会の ・コミ福公務員の会 ＜ワークショップ＞	「地域を支える福祉専門職の活動・組織のあり方を考えるワークショップ —社協職員・行政職員が考える問題意識の共有を通して—」 社協に就職したコミ福卒業生有志により2005年8月から「コミ福祉協会の会」が組織され、また2010年8月には行政機関に就職した公務員による「コミ福公務員の会」が組織され活動が行われている。これらの会では、卒業生間の交流を深めるとともに、日々の仕事に流され見失いがちな姿勢を見直すべく、担当業務や課題と感じていることなど関心のあるテーマを取り上げた勉強会を年に1～2回開催している。2013年は2つの会合同で勉強会を開催しこれまでに2回開催した。直近の会においては、社協と行政の特徴とそれぞれの課題、連携に向けた可能性をテーマとしたワークショップが開催された。このワークショップを通して、今後の社会構造の変化を鑑みた場合の社協・行政機関に共通する課題として、「地域を支える福祉専門職の活動および組織のあり方」が共有されました。今回このテーマをとりあげ、さらに深めることを目的とし、社協の会、公務員の会、各1名ずつ、現業務から得た問題意識に関する報告をもとに現状における課題を共有し、克服するために今後行っていくべき方策を検討したい。ワークショップ形式にて進行し、参加者全員で考えることにより、相互の学びを得たいと考えている。